

「おなごし」の暮らしと子産み—四国地方B町のフィールドワークから—
鳴門教育大学校教育 ○ 中山まき子

〔目的と方法〕 本研究では「子どもを持つこと（子どもを産み育てる社会）の意味とその歴史の変遷」を地域の複合構造の中で、立体的・重層的に探ることを目的としている。

具体的には1994年秋以降、2年間にわたり、四国地方のB町をフィールドワーク地として、可能な限り地域に密着し、(1)地域の政治的・経済的・社会的状況や、それらを司る立場にあるキーパーソンに着目し「当該地域にとっての子どもを持つ意味とその変容」に関する聞き取り調査、および参与観察を行なっている。また、(2)当該地域を構成している女性と男性、高年齢層から若年齢層までの個々人から、子どもを持つことを主軸とした生活史に関する聞き取り調査を行い、世代間による生活と意識の類似点・相違点、諸特徴などを探ろうとする。

〔結果〕①調査地の選定作業と予備調査・資料収集を経て、B町の産業構造、就業構造、出生率等の人口動態統計、人口流失／流入状況、保育所の状況、教育環境について、第二次大戦後から1995年現在までの歴史的变化を把握した。B町における1994年度の人口は2,850人（男1,320人・女1,530人）で、世帯数は約千世帯である。年間出生数は25人、死亡数は32人で、社会動態は転入92人に対して、転出130人と人口の減少が進んでいる。こうした状況をまず詳しく報告する。さらに、②本調査に入り（1994年1月末現在の滞在調査日数：予備調査12日＋本調査19日）、まず高齢者（大正10年生から明治30年生まで）の主に女性を中心に、彼女らの生活と子産みの民族誌、およびその諸特徴と変化を報告する。